

「什の掟」(じゅうのおきて) と「寛容」

會津藩校 日新館 — 白虎隊の学び舎 「ならぬことはならぬものです」

同じ町に住む六歳から九歳までの藩士の子供たちは、十人前後で集まりをつくっていました。この集まりのことを會津藩では「什 (じゅう)」と呼び、反省会を行いました。

- 一、年長者 (としようえのひと) の言ふことに背いてはなりません
 - 一、年長者にはお辞儀をしなければなりません
 - 一、嘘言 (うそ) を言ふことはなりません
 - 一、卑怯な振舞をしてはなりません
 - 一、弱い者をいぢめてはなりません
 - 一、戸外で物を食べてはなりません
 - 一、戸外で婦人 (おんな) と言葉を交へてはなりません
- ならぬことはならぬものです

そして、背いた者がいれば、什長はその者を部屋の真ん中に呼び出し、事実の有無を「審問」しました。子供にとって仲間たちから受ける審問は辛いものではありませんが、「お話」も「制裁」もすべて大人たちに言われてつくったものではなく、**子供たちが制約や強制を受けずに自分たち自身で作り、「会津武士の子はこうあるべきだ。」ということを互いに約束し、励み合ったのです。**

「壁」ではなく、「橋」を築く 「寛容と認識的想像力」

新型コロナウイルスパンデミックで混沌とした状況が続く今だからこそ、世界の叡智を集め、協働して解決の糸口を探ることが肝要です。分断の種が尽きない世界情勢ですが、日常の中でも、「壁ではなく橋」を築くことを心掛けたいものです。

加えて、**分断を排し、他者と繋がるために大切な更なるポイントは、「寛容 Tolerance」です。「寛容」を旨として生きる時に不可欠なのは、『認識的想像力』ではないでしょうか。**

ただイメージネーションを働かせるだけの「想像」ではなく、相手がどのような立場・心境・状態にあるかを慮 (おもんばか) って行動し言葉を発する『認識的想像力』こそが大切なのだと、切に感じます。この認識的想像力は、現在のような混沌とした不透明な時代のリスク回避にも力を発揮するはずです。

そして、認識的想像力を培うために必須なのが、専門領域や興味ある分野を掘り下げての基盤作りと、多くの知識に昇華する教養の力です。その力を以って、「地球という家」の環境を守り、平和を次世代に繋いでいくことが、私たちの世代の役割です。平和を妨げる分断を防ぐには、わかるはずという甘えを捨てて、懇切丁寧な説明と合意形成のための絶えざる対話の実践が望まれます。

「親切な人＝心が広い人」ではない「脳科学者が考える‘寛容’の本当の意味」 HP 参照

「ファシズム」という言葉を聞いたことがあると思います。昨今は「右傾化」と捉えることが主だと思いますが、ファシズムという語源は、イタリア語でば、**「絆」**という意味だそうです。

「絆」と言えば、東日本大震災の後、「人と人との結びつき、支え合いや助け合い」を指すというポジティブな使い方と、元々は「動物を繋いでおく綱」つまり動けなくする、束縛するといった「絆」の意味に嫌悪感を示す人もいて、どんなことでもネガティブな人はネガティブなんだなと思いました。

このファシズムだったり、不寛容性だったり。今、「これはよくない」「あれはよくない」と言われているものを、まずはよくないと思うことを止めて、ちょっと一歩引いてみて、「こんな現象がある意味はなんだろう」を考え直してみようということが必要かもしれません。

例えば、海で溺れている人がいます。まずは助けますね。その時に、じゃあ浮き輪を投げてあげて、よかったね、助かったね、終了。という感じではなく、じゃあどうして溺れたのかといったことまで聞くのです。繰り返さないようにするためにはどうしたらいいのか。そもそもどうしてそんなことがしたくなって、そのような結果に至ってしまったのかまで遡る。**自分で自分の意思や原因に気付いてもらって、自分でこうしようと思ってもらえたらいいねという姿勢が重要です。**

今はこうだからこうしようというお説教や提案をするというよりは、話していく中で、結局自分がどう生きたいのか。やっぱり、自分がどう思っているのかが結果的にコミュニティでは絆だったという、集合的な一人一人の意思があって、ようやく世界はできてるのかなと思うのです。